

青い石とメダル

小川未明

青空文庫

犬いぬころしが、はいってくるといので、犬いぬを飼かっている家うちでは、
 かわいい犬いぬを捕とられてはたいへんだといつて、畜ちく犬けん票ひょうをもら
 っってきてつけてやりました。

しかし、かわいいそうなのは、宿やどなしの犬いぬでありました。寒さむい晩ばん
 も、あたたかい小舎こやがあるのでないから、軒のき下したや、森もりの中なかで、
 眠ねむらなければなりません。また、だれも、畜ちく犬けん票ひょうなどをもら
 っってきて、つけてくれるものがなかったのです。

勇ゆうちゃんは、外そとを歩あるいているとき、いろいろの犬いぬを見みました。
 首輪くびわに、札ふだのついているのは、どこを歩あるいても、安あん心しんだか
 ら、べつになんとも思おもわなかったけれど、なかには、首輪くびわのない

もの、また、首輪くびわはあつても、札ふだのついていないものがありました。それらの犬いぬたちは、捨すてられたか、森もりや、空あき家やの中なかで生まうれたかして、まったく飼かい主ぬしのいないものでありました。

しつかりした人にんげん間の助たすけを受けているものと、なんの助たすけもないものと、どちらがしあわせでありますよう？

「犬いぬころしに見みつかつたら、いつ捕つかまえられてしまうかしれない。」と、勇ゆうちゃんは、札ふだのない犬いぬを見みるとあわれに思おもいました。そして、そのたびに、クロのことが、心しんぱい配ばいでならなかつたのでした。

勇ゆうちゃんの、かわいがっているクロは、やはり、宿やど無なし犬いぬであります。森もりの中なかで生まうまれて、森もりの中なかで大おおきおくなったので、めつた

の^{ひと}人にはなつきませんでした。が、^{ゆう}勇ちゃんは、^{じぶん}自分のもらったお菓子^{かし}を^わ分けてやったり、また、^{さかなほね}魚の骨があれば、^もわざわざ持つていつてやったり、^{ふだん}平常から、クロをかわいがつていましたので、クロは、だれよりも、いちばん^{ゆう}勇ちゃんになつていました。

ほかの^{ひと}人が、クロを^よ呼ぶと、すぐ^{ちか}近くまできて、^お尾を^ふ振るけれど、^{あたま}頭をなでようとしても、そばへはきませんでした。そして、^{ちゆういぶか}注意深く、^{あいて}相手の^{かおいろ}顔色をうかがっていました。勇^{ゆう}ちゃん^よが呼ぶと、^{ゆう}勇ちゃん^{あんしん}だけに、安心してるとみえて、そばへ^よ寄り、^{あし}足もとへ^よからだをすりつけました。そして、^{あたま}頭をなでてやると、^め目を^{ほそ}細くして、クン、クンといつて^{よろこ}喜びました。だから、^{ゆう}勇^{ゆう}ちゃんが、クロをかわいがるのも^{むり}無理はありません。

「ねえ、お母さんかあ、クロを家の犬うちいぬにしてくださいませんか。」と、勇ちゃんゆうは、たびたび、頼んだたののであります。

いつも、お母さんかあは、こころよい返事へんじをしてくださいませんでした。

「生きものを飼うかのは、めんどろです。しまいには、その世話せわを私わたしがしなければなりませんから……。」と、おつしやいました。

「いいえ、お母さんかあ！ 僕ぼくが、犬いぬの世話せわをします。」と、勇ちゃんゆうは、いいましたけれど、お母さんかあは、なかなかそれをお信しんじになりませんでした。

また、あるときは、勇ちゃんゆうがしつこく頼むたのと、お母さんかあは、「いつかも、おまえがそういつて、小鳥ことりを飼かったことがあるが、

その世話は、みんなお母さんがしなければならなかったじやありませんか？ 小鳥とちがつて、犬の世話は、私にはできませんから。」と、おつしやいました。

勇ちゃんは、お母さんに頼んでも、望みがないと思いましたが、ら、こんど、お父さんをお願いしてみようと考えました。そして、お父さんが、承知してくださいましたなら、そのときは、お母さんだつて、許してくださいるにちがいないと思つたのでした。

「よう、お父さん！ クロをうちの犬にしてください。」
 勇ちゃんは、役所からお帰りになつた、お父さんの頸つたまにすがりついてねだりました。さすがにお父さんは、自分が子供の時分、犬や、ねこや、小鳥や、そうした動物がすきだつたば

かりでなく、飼ったことの経験があるので、頭からいけないとは、いわれませんでした。そして、クロという犬は、どんな犬だと、くわしく、勇ちゃんから、ようすをおききになりました。

勇ちゃんは、知るかぎり、クロのりこうなことを話しました。

「そりや、クロという犬はりこうなんですよ。僕とならいつしよについてゆきますけれど、ほかの人には、ついてゆかないのです。僕といっしよでも、すこし遠くへゆくと、さつさと独りで帰ってしまいます。自分に、鑑札がないということを知っているんですね。」

こう、いいますと、お父さんは、うなずきながら、きいていられましたが、

「おまえのいうとおりです。しかし、そのクロばかりでありませ
ん。すべて野犬やけんはりこうなものです。だれも、保護ほごしてくれるも
のがないから、自分じぶんの気きを許ゆるさないのです。そして、生まれから、
野ので育そだった犬いぬは、家うちへつれてきてもいつくものではないから、う
ちで飼かうなどと考かんがえずに、おまえが、かわいがってやれば、それ
でいいのです。」と、お父とうさんは、論さとされました。

なるほど、いつかないということが、勇ゆうちゃんにもわかったか
ら、このうえ無理むりにお父とうさんにお願ねがいしても、むだだと悟さとったの
でした。

「しかし、犬いぬころしに見みつかつたら、つれていってしまわれるだ
ろう……。」「と思おもうと、どうしたらいいだろうかと気きをもんだの

でした。

晩ばんに、森もりの方ほうで犬いぬのなき声ごえがしたり、昼間ひるまでも、犬いぬがやかましくほえて、あたりがなんとなく騒さわがしく感かんぜられると、犬いぬころしが、やってきたのでないかしらん、そして、クロが、つかまつたのでないかしらんと、胸むねがどきどきしました。勇ゆうちゃんは、外そとへ飛び出だして行って、クロの姿すがたを見るまでは、安あん心しんされなかつたのであります。

ある日ひ、勇ゆうちゃんは、徳とくちゃんが、銅どう製せいのメダルを持つているのを見みました。そのメダルは、ちようど、畜ちく犬けん票ひようが、古ふるくなつたような、大おおきさも、色いろ合あいも、そつくりでありましたので、もしこれを犬いぬの首輪くびわにぶらさげておいたら、だれの目めにも、畜ちくけ

犬票いぬひょうと見えるであろうと思おもいました。

「徳とくちゃん、そのメダルを、僕ぼくに出来ない？」

と、勇ゆうちゃんは、いいました。

徳とくちゃんは、目めをまるくして、驚おどろいたというようすを

て、

「これは、僕ぼく、やつと人ひとからもらった大事だいじなやつなんだぜ。デッ

ドボールの優ゆう勝しょうメダルだからな。」と、徳とくちゃんは、答こたえま

した。

「なにかと交こう換かんしようよ。」と、勇ゆうちゃんは、いったのです。

「どんなもの？」

「万年筆まんねんひつと……。」

「いつかのかい、あんなものはいやだ。だってプラチナがなくなつて、そのうえ、こわれているんじゃないか？ あんなもの、字なんか書けやしないもの。」

「じゃ、僕（ぼく）の持つ（も）ているもので、なんでも、君（きみ）の好き（す）きなものと換（か）えてくれないか。」

勇（ゆう）ちゃん（が）、こう（い）うと、徳（とく）ちゃん（は）、メダル（を）勲（くん）章（しょう）のよ（う）に、自（じ）分（ぶん）の胸（むね）のあたり（に）つ（け）るまね（を）し（て）み（せ）ま（し）た。

「いつか、僕（ぼく）に（み）せ（た）、あ（あ）の青（い）石（いし）と（な）ら、換（か）えて（も）い（い）よ。」
や（や）し（ば）ら（く）し（て）か（ら）、徳（とく）ちゃん（が）、こ（う）答（こた）え（ま）し（た）。

「あ（あ）の、僕（ぼく）が、田（いな）舎（なか）か（ら）持（も）つ（て）き（た）、青（あ）い石（いし）か（い）？」
こ（ん）ど（は）、勇（ゆう）ちゃん（が）、目（め）を（ま）る（く）し（た）の（で）す。

「ああ、あの青い石となら、換えてもいいな。」と、徳ちゃんは、勇ちゃんの顔を見ました。

「あの、青い石は、大事なんだがなあ。」と、勇ちゃんは、考えていました。

「あの石でなければ、僕も、いやだ！」と、徳ちゃんが、いいました。

「万年筆だといいのだがなあ……。君、万年筆では、だめかい？」

「あんな、君んちの、姉さんの持っていた、お古なんかいやだ。」
 「じゃ、青い石と換えようよ。」と、勇ちゃんは、メダルがほしいばかりに、つい決心しました。

「ああ、換えよう！」

徳ちゃんとくは、青い石あおいしが、前まえから、ほしかつたので、につこりしました。勇ちゃんゆうは、自分じぶんの家うちへ青い石あおいしを取りとに駆かけてゆきました。

この、青い石あおいしというのは、勇ちゃんゆうが、夏休なつやすみに、遠い北とおきたのおばあさんのところへいったとき、垣根かきねのきわの、道みちの上うへに頭あたまを出だしていたのです。あまりに、青あおくて、きれいだったので勇ちゃんゆうは、棒ぼうきれでいっししようけんめいに、その石いしを掘ほり出だしました。そして、野のばらの咲さく里川さとかわで、その石いしを洗あらいました。石いしは水みずにぬれると、空そらの色いろよりも、もつと青い色あおいろをしていました。

勇ちゃんゆうといっしよに、青い石あおいしは、暗くらい長い、トンネルを汽車きしゃ

で通つて、知らない他国へきたのでした。そして、知らない町の下で、じつと太陽を見上げました。石は、ものをいいませんが、どんなに心細かったかしれません。勇ちゃんが、この大事な石を、友だちに見せると、

「いい石だなあ。」と、良ちゃんも、徳ちゃんも、善ちゃんも、ほめたのでした。

それから、勇ちゃんは、石をひきだしの中に入れて、ときどきだしてみました。この石を見るといつでも、田舎のおばあさんの顔や、おばあさんの家のいけがきや、白い野ばらの咲いている里川の景色が、ありありと浮かんで見えたのでした。

しかし、青い石よりは、クロの命のほうが、はるかに大事であ

つたからです。勇ちゃんは、石と取り換えたメダルをクロのくびにつけてやりました。そのためか、あるいは、クロがりこうで、用心深かったためか、ほかの野犬が、幾ひきも捕まえられていたのに、クロだけは、無事でありました。

「あんなに、勇治が犬をかわいがるのだから、ほんとうの鑑札を受けてやろうか。」と、ある日勇ちゃんのお父さんは、クロが喜んで、勇ちゃんに飛びついていようすを見て、こういわれたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 8」講談社

1977（昭和52）年6月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第6刷発行

底本の親本：「青空の下の原っぱ」六文館

1932（昭和7）年3月

初出：「婦人倶楽部」

1932（昭和7）年1月

※表題は底本では、「青《あお》い石《いし》とメダル」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：藤井南

2015年12月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

青い石とメダル

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>